

那珂川町の文化財Ⅶ

那珂川町の古墳時代遺跡

2008

那珂川町教育委員会



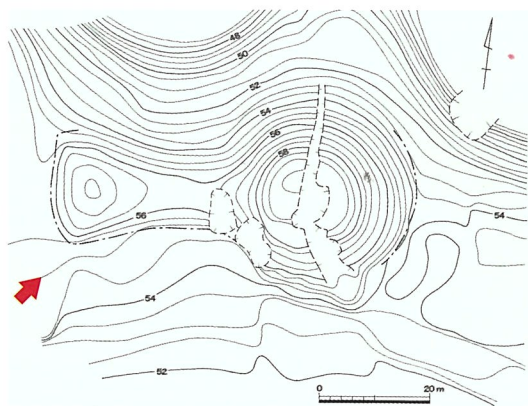
はじめに

弥生時代、小さな国を治めていた人たちは、自分たちの権力を示すため、一般の人たちとは違う場所に墳丘墓などのお墓をつくり、鏡や剣など豪華な副葬品と一緒に埋葬されました。時代とともにこの傾向は一段と増し、4世紀前後になると特定の支配者の絶対的な権力の証として、巨大なお墓がつくられるようになりました。これが、古墳時代のはじまりです。古墳時代になると大和を中心とした勢力が強まり、これに組みする地方の王には朋友の証として鏡が送られました。それと同時に各地で「前方後円墳」という巨大なお墓があらわれ、5世紀には「大山古墳」など世界でも屈指の大きさを誇るお墓がつくられるようになりました。6世紀に入ると、「磐井の反乱」で代表されるように、全国各地で豪族の反乱がおこり、この時期を境に前方後円墳はつくられなくなったり、規模が縮小されたりしていきます。そしてこれに変わるかの様に「群集墳」といわれる小さな古墳が数多く密集してつくられるようになります。こういった現象があらわれた理由として、有力豪族をとおして家族集団を支配していた中央政權が、直接小さな家族集団を支配するようになったことが考えられ、有力豪族が力を失っていく過程を反映しているということが出来ます。その後、古墳づくりは衰退し、新たな古墳をつくることを規制する「大化の薄葬令」のころには、多くのところでその姿を消していくのです。

今回は、日本の成立過程にある古墳時代を取り上げ、那珂川町の主要な遺跡を紹介します。この冊子を通じ、当時の那珂川町を知っていただき、太古に思いを馳せていただければ幸いです。

安徳大塚古墳（国史跡）

安徳大塚古墳は、那珂川流域の平野部で一番奥の、眺めの良い丘陵上につくられた前方後円墳です。現在は木が生い繁り良くわかりませんが、とても美しい形をしています。全長は64 mで、前と後ろに濠をもち、それを含めると81 mほどの大きさになります。本格的な発掘調査が行われていないため、詳しいことはわかっていませんが、埋葬施設は礫床粘土槨と思われ、つくられた時期は4世紀の後半ごろと考えられています。「葺石」と「埴輪」が確認されていることから、石を敷き詰めまわりに埴輪をめぐるせた、当時の壮観な姿を想像することができます。



▲安徳大塚古墳の全景

古墳の南半分だけ樹木を伐採して、図の矢印の方向から撮影したのですが、その独特の形がよくあらわれています。後円部（写真奥）は高さ約6m、直径約35m、前方部（手前）は高さ約2m、幅が約20mあります。

妙法寺 2 号墳

妙法寺 2 号墳は、那珂川左岸の標高 50 m ほどの丘陵上につくられた前方後方墳です。全長が約 18 m と安徳大塚古墳に比べ小型ですが、三角縁神獸鏡という貴重な銅鏡が出土し注目を集めました。また、古墳の形をつくりだす周溝が、前方部で途切れる特殊な形をしており、同様の前方後方墳が発見されている山陰地方とのつながりを示す貴重な資料となりました。古墳のつくられた時期は、出土品から 4 世紀の後半ごろと考えられています。



▲妙法寺 2 号墳の全景

後方部の中心にあった木棺（矢印）から、三角縁神獸鏡が出土しました。



▲三角縁神獸鏡（町指定文化財）
裏面に六体の神様と四体の聖獣が描かれる、珍しい形式の鏡です。



▲割竹形木棺出土状態

妙法寺古墳群のつくられている丘陵の斜面から、偶然発見されたものです。発見された時は、地下 2 m のところに、底を上に向け斜めに埋まっていた。恐らく、このすぐ近くにある古墳が山崩れをおこし、この場所に埋もれてしまったものと考えられます。（木棺の長さは約 3.6 m）

エゲ古墳

エゲ古墳は、那珂川右岸の平野と接する丘陵先端の、とても見晴らしの良い場所につくられた古墳です。一辺が約 18 m の方墳で、二段につくられており、遠方から見ると上半分を削ったピラミッドのような形をしています。古墳の中心には割竹形木棺が埋葬されており、棺内からは銅鏡や剣をはじめとする副葬品がそのままの状態で発見されました。これだけ豊富な副葬品が大きな盗掘も受けず、ほぼ完全な状態で見つかることは珍しく、当時の埋葬の様子を知る上で貴重な資料となりました。古墳のつくられた時期は、安徳大塚古墳や妙法寺 2 号墳とほぼ同じ 4 世紀の後半と考えられています。



▲エゲ古墳の全景

古墳の中央で見つかった割竹形木棺内（矢印）からは、大量の副葬品が出土しました。



▲四獣形鏡（町指定文化財）
青銅製の鏡で、四体の神獣が描かれています。



▲副葬品の出土状態

頭位と思われる部分から鏡・剣・玉が、棺の両端に工具や武器が置かれていました。また、鏡は木箱に入れたらしく、鏡の下には木片が残っていました。

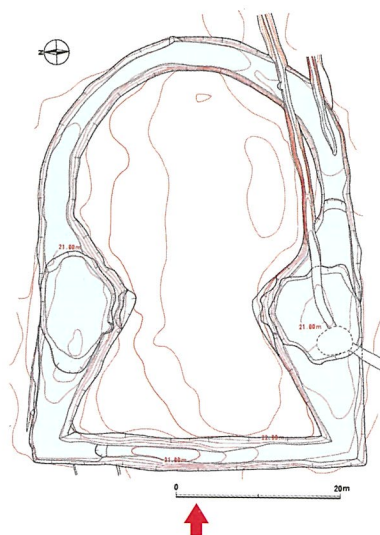
貝徳寺古墳

貝徳寺古墳は、梶原川右岸の平野部につくられた前方後円墳で、墳丘が大きく削り取られていたため、従来その存在は知られていませんでした。昭和56年度に行われた調査の結果、古墳の回りをめぐる馬蹄形の周溝を検出し、全長54mの前方後円墳であることがわかりました。石室はすでに壊されなくなっていました。周溝の中からは大量の埴輪が出土しました。北部九州では埴輪の出土例が少なくいずれも貴重な資料ですが、特に蓋形埴輪は九州で完全な形で残る唯一のものです。また、古墳のつくられた時期は、出土した須恵器から5世紀後半と考えられています。



▲貝徳寺古墳の全景

図の矢印の方向から撮影したもので、本来は高い盛土があったと思われます。



▲蓋形埴輪（高さ46cm）



▲人物埴輪・家形埴輪・壺形埴輪（家の高さ45cm）

カクチガ浦10号墳

カクチガ浦10号墳は、エゲ古墳と同じ丘陵上につくられた円墳です。直径が約25mとカクチガ浦古墳群の中では群を抜いて大きく、墳丘は二段に築かれていました。墳丘の上段には盛土が流れないよう



▲カクチガ浦10号墳の全景



▲馬形埴輪・家形埴輪（馬の高さ65cm）

うに「葺石」といわれる石が葺かれていました。埋葬施設は古い形式の横穴式石室で、石室内からは玉類・鉄鏃・刀子・鏝・須恵器が出土しました。また、古墳上段の葺石部分から馬と家の埴輪が出土しており、それらの出土品から古墳のつくられた時期は5世紀中ごろと考えられます。

井河 1 号墳

井河 1 号墳は、那珂川左岸の標高約 40 m の丘陵上につくられた、直径が約 18 m の円墳です。古墳の中心には古い形式の横穴式石室がつくられており、その石室の内部からは鈴釧・釧・玉類などの装身具や剣・刀・鉄鏃などの武器類が多量に出土しました。また、周溝からは須恵器・土師器などの土器類が出土しており、それらから 5 世紀後半ごろつくられたと推定されています。



▲井河 1 号墳の全景



石室から出土した装身具▶

釧・鈴釧(上)は腕輪として、勾玉などの玉類は写真の樣につなげ、首飾りなどに使われました。

小丸 1 号墳

小丸 1 号墳は、那珂川西岸の標高約 40 m の丘陵上につくられた前方後円墳です。古墳の 2/3 ほどが削り取られていましたが、全長は約 25 m で、墳丘は二段につくられていました。墳丘上段には石垣状の葺石がめぐらされ、上段と下段の間につくられたテラス部分からは器台形の土製品が出土しました。古墳のつくられた時期は、出土した須恵器から 6 世紀の中ごろと考えられます。



▲器台形の土製品（右の高さ 37cm）
祭祀につかわれたものと思われます。

◀小丸 1 号墳の全景

古墳の中央には石室がつくられていました。

観音山古墳群

観音山古墳群は本町の東に位置する観音山の山裾に広がる古墳群で、その総数は 250 基以上になると思われます。これまで約 130 基の古墳の調査を行いました。そのほとんどは径 10 m 前後の円墳でした。時期的には 6 世紀から 7 世紀にかけてつくられていますが、そのうち 6 世紀後半代のものが大半を占めています。また、本古墳群の中で小型の前方後円墳（中原 I 群 1 号墳）が発見されており、前方後円墳の小型化と群集墳の盛行を示す貴重な資料となりました。



▲観音山古墳群中原Ⅳ群の全景

古墳が密集してつくられている様子がわかります。写真の中には 28 基の古墳が写っています。

まるのくちこふんぐん 丸ノ口古墳群

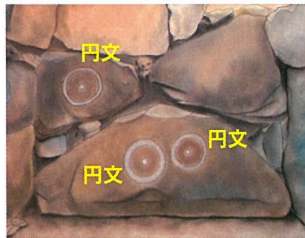
丸ノ口古墳群は那珂川左岸の片縄山の東斜面に広がる古墳群で、これまでに42基の古墳の調査を行っています。その結果、直径が6～16mの円墳と、盛土がない古墳（小石室）によって構成されていることがわかりました。古墳の内部には横穴式石室がつくられており、そこからは装身具や刀などの武器が出土しています。また、古墳の入口や周溝からはたくさんの土器が出土しており、それらの出土品から6世紀ごろにつくられたことがわかりました。さらに、平成10年度には2基の装飾古墳が発見され、注目を集めました。



▲発掘調査の様子（平成11年度撮影）
現在は那珂川北中学校になっています。

丸ノ口古墳群の装飾

装飾古墳と確認されたのはV群5号墳とVI群2号墳で、石室の文様を見てみると、V群5号墳には石室の奥壁に直径約30cmの円文が3ヶ所描かれています。円文とは丸い形をした文様のことで、意味としては「的」「太陽」「鏡」などをあらわしているものだと考えられています。2段目の石の文様は少し歪んで見えますが、特殊なカメラで撮影したところ、他の文様と同じようにきれいな円文であることがわかりました。一方、VI群2号墳には石室の壁に直径が約30cmの「同心円文」と、「舟」や「波」をあらわしたと思われる文様が描かれていることがわかりました。丸ノ口古墳群の装飾は、石の表面を突つくようにたたいて浅く窪ませ文様を表現する彫刻系の装飾ですが、技法としては珍しいものです。この技法で装飾を行っている古墳は、本古墳群以外では6例しか発見されておらず、貴重な発見となりました。



V群5号墳の装飾とそのイラスト



VI群2号墳の装飾とそのイラスト



仲遺跡群

仲遺跡群は那珂川右岸の標高約 25 m の微高地上に広がる、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡群です。このうち遺跡の中心となるのは古墳時代のはじめごろの遺跡で、^{たてあなじゅうきょあと} 竪穴住居跡が 36 棟も見つかっています。井戸や倉庫、集会所と思われる大型の建物跡も見つかり、当時のムラの様子を知る上で大変貴重な発見となりました。



▲仲遺跡群の全景（平成 3 年度撮影）
ミリカローデン那珂川建設前に行った発掘調査の様子です。

松木遺跡群

松木遺跡群は梶原川の河岸段丘上に広がる遺跡群で、縄文時代から鎌倉時代までの遺跡が重なりあった複合遺跡です。このうち古墳時代のものとしては、竪穴住居跡だけでも 50 棟も見つかり、かなり大きなムラであったことがわかっています。しかもその竪穴住居跡は古墳時代のはじめごろから終わりごろのものまで見つかり、^{へんせん} 竪穴住居跡の変遷を知る上で大変貴重な資料となりました。



▲古墳時代の終わりごろの竪穴住居跡
手前の壁ぎわにカマドがつくられています。

井河遺跡群

那珂川西岸の微高地上に広がる遺跡群で、昭和 62 年度にその一部を調査しました。その結果、6 世紀の竪穴住居跡、土壇、大溝が見つかり、そのうち大溝から子持勾玉という珍しい勾玉が出土しています。また、竪穴住居跡や土壇からは土製鏡・土製勾玉・滑石製白玉など、祭祀関係の遺物が多量に出土しています。



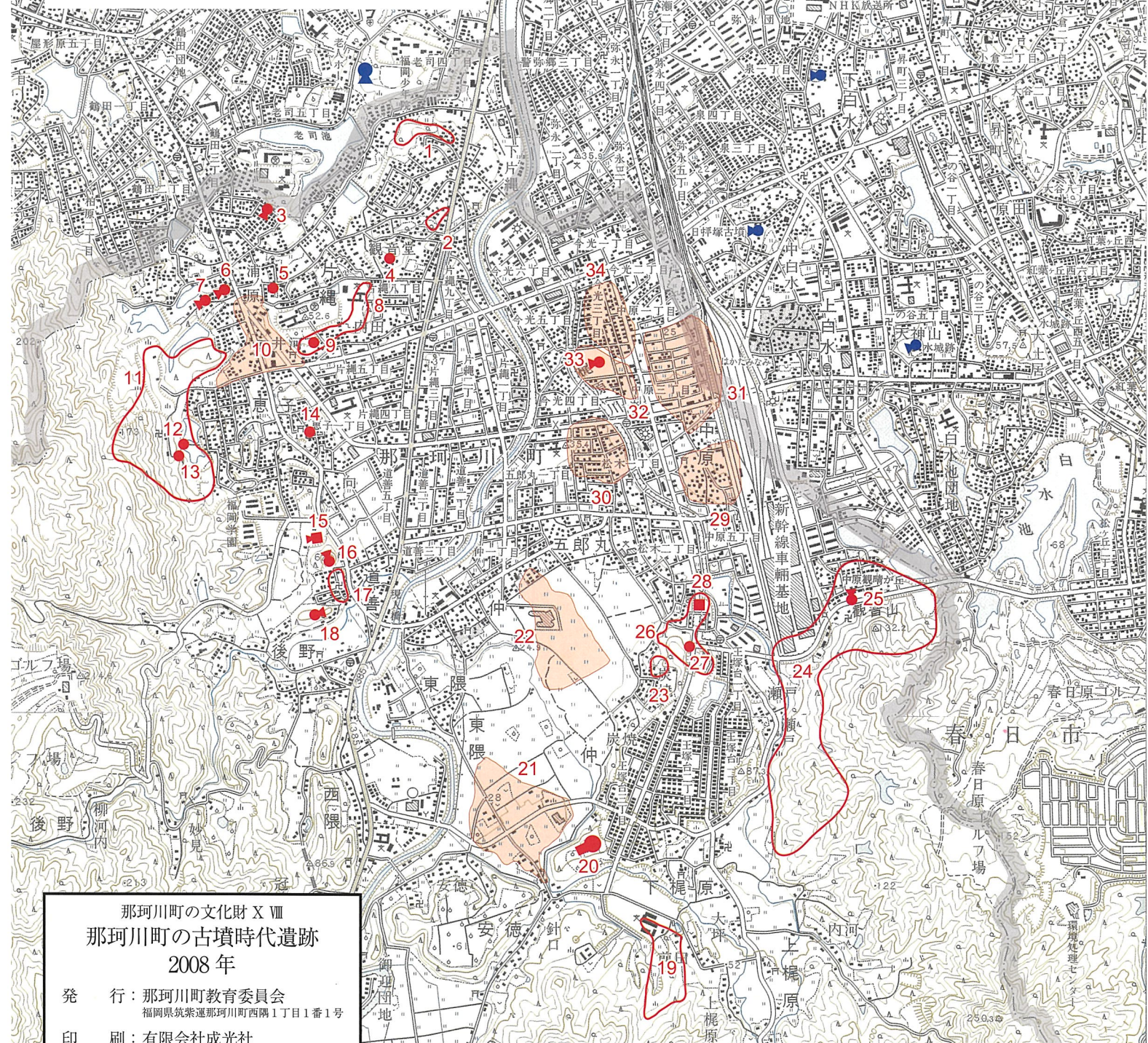
子持勾玉▶

おわりに

ここで紹介した遺跡以外にも、那珂川町にはたくさんの古墳時代の遺跡があります。古墳だけを見てみても、現在わかっているだけで大小あわせると 450 基ほど確認されています。一つの地域でこれだけの数の古墳が存在すること自体も珍しいのですが、この中でも特に首長の墓とされる前方後円（方）墳が多くつくられていることが大きな特徴です。町内には 9 基の前方後円（方）墳がありますが、福岡市の南部や春日市も含め、那珂川の中流域に範囲を広げ見てみると、16 基の大古墳群を構成していることがわかります。しかもこれらの古墳は 4 世紀の後半につくられた安徳大塚古墳や妙法寺 2 号墳から老司古墳（福岡市）、貝徳寺古墳、日拝塚古墳（春日市）を経て、前方後円墳が小型化する 6 世紀の中ごろにつくられた小丸 1 号墳や観音山中原 I 群 1 号墳まで、時代を追ってつくられ続けています。このことは日本の国が一つにまとまっていく古墳時代において、那珂川中流域が大切な役割を果たしていたことを物語っています。

1. 野口古墳群
2. 観音堂古墳群
3. 浦ノ田1号墳
4. 権現塚古墳
5. うめばし山古墳
6. 小丸1号墳
7. 小丸2号墳
8. 井河古墳群
9. 井河1号墳
10. 井河遺跡群
11. 丸ノ口古墳群
12. 丸ノ口V群5号墳
13. 丸ノ口VI群2号墳
14. 恵子若山古墳
15. 妙法寺2号墳
16. 妙法寺1号墳
17. 油田古墳群
18. 大万寺前古墳
19. 平蔵古墳群
20. 安徳大塚古墳
21. 安徳原田遺跡群
22. 仲遺跡群
23. 炭焼古墳群
24. 観音山古墳群
25. 観音山中原1群1号墳
26. カクチガ浦古墳群
27. カクチガ浦10号墳
28. エゲ古墳
29. 中原塔ノ元遺跡群
30. 松木遺跡群
31. 中原・ヒナタ遺跡群
32. 今光・宗石遺跡群
33. 貝徳寺古墳
34. 今光・地余遺跡群

※赤文字は冊子で紹介した遺跡



これまで調査された那珂川町の主な古墳時代遺跡と前方後円墳の分布
(青印は町外の前方後円墳)